

志賀直哉年譜考 (二)

——明治十六年から明治二十六年まで——

生 井 知 子

明治十六年(一八八三)

(数え一歳・満〇歳)

2・20

石巻(現・宮城県石巻市住吉町一丁目八ノ三五、阿川弘之『志賀直哉』掲載の橋本晶の調査)に、志賀直温・銀夫妻の次男として志賀直哉が生まれる。(志賀家系図)

入り口が凍りついて産婆が入れない事がないように、祖母の弟(木村精一郎)が夜中よく湯をたぎらせていた。(『暗夜行路』草稿27)

石巻には相馬家の事務所もあり、志賀留女の母・木村ヨシ、弟で旧相馬藩士の木村精一郎夫妻、その養嗣子・重堅とやがてその妻になる養女・秀も、当時石巻に在住していた。木村家は、直温一家が石巻を去った後も十年以上石巻に滞在し、石巻で生まれた重堅の長女・峯は、後に志賀直方に嫁ぐ事になる。住吉町の家の大家、道向うに住む志賀徳藏も遠い親戚だった。重堅は明治中期には東京に戻り、赤坂福吉町で相馬家の若様の御養育係を勤めた。(阿川弘之『志賀直哉』)

実吉英子によれば、直温は子供達に対して口を開けばお説教というような人だった。(阿川弘之『志賀直哉』)

直温の趣味は、盆栽と囲碁。(志賀直三『阿呆伝』)

直温と留女には意地悪な所があり、直哉にも遺伝している。(『身辺のこと』)

銀の実家・佐本家は、伊勢亀山の藩士で、根岸に家があり、下町風で気持ち低調だった。(『実母の手紙』)

佐本家は、直哉が覚えてからは、根岸の旧藩邸の近くに住んでいたが、江戸時代から下谷にいて、下町風な所があり、佐本鑑蔵などは敗残の江戸っ子丸出しの人物だった。直哉は佐本家を好まず、特に鑑蔵の軽佻な、意志の弱そうなのに軽侮の念を持っていた。留女は、直哉に軽佻な行いがあると「血筋は争われないものだ」と嘆息した。(『身辺のこと』)

直哉には、石巻時代の記憶はない。その後、石巻には三回行った。(『稲村雑談』)『転居二十三回』)『白線』)

9・25
古河市兵衛が、足尾銅山の景気がよく、小野組瓦解の際の相馬家の損失を元利償った後は、足尾銅山の株を青田綱三と志賀直道も分け持つべきだ、当然の事だと勧めるが、直道は景気の良い山の株を分けて貰うことは忍びないと断る。

〔祖父〕二十五)

10・2
志賀直道が、富田高慶に、足尾銅山の本年初半季出銅は四十万斤余で、分配金は三千六百円だと報告。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M16・10・2書簡)

12・10
錦織剛清が、相馬邸を訪れ、志賀直道らに向かつて、相馬誠胤の監禁を解き、夫人を離縁するよう建白、誠胤と会わせるよう詰め寄る。翌日も来邸するが聞き届けられず、東京軽罪裁判所に告発する。十三日に東京軽罪裁判所から直道に召喚状が届き、十四日、直道は出頭する。(矢田紳雲『相馬事件の真相』)

12・?
足尾銅山が意外の盛業に立ち至ったのは古河市兵衛の尽力に基づくものであると、志賀直道は感謝の意を表し、今後一カ年の配当金が二万円を超過する場合は、超過分を折半し、その半額を古河市兵衛に贈与するという特約が成立する。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

暮 志賀銀が石巻から東京の志賀留女に送った手紙あり。(『実母の手紙』)

明治十七年(一八八四) (数え二歳・満〇〜一歳)

2・13 錦織剛清、相馬家で乱暴を働き、逮捕される。拘留七日。(錦織剛清『闇の世の中』)(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

2・20 癲癩病人鎖錮出願手続の改正に伴い、相馬充胤らが、相馬誠胤に対する「癲癩病人鎖錮願」を麴町警察署に提出。願

書を受けて、二十日、二十二日、二十六日、警視庁医務所長・長谷川泰、東京府癲狂院長・中井常次郎らが、相馬誠胤の既往症などを聴取し、診察する。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

2・29 志賀直道が、富田高慶に、錦織の一件につき報告。今明日中には検査医の中井と長谷川が診断見込み書を警視庁に差し出すとのこと。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M17・2・29書簡)

3・3 相馬誠胤の診察をした長谷川泰と中井常次郎が、「従四位相馬誠胤診断書」を作成、誠胤は「時発性情性偏狂」、ただし鎖錮すべからずと診断。(錦織剛清『闇の世の中』)(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

3・9 相馬誠胤の鎖錮は認めないと、麴町警察署が通達。(矢田挿雲『相馬事件の真相』) *錦織剛清『闇の世の中』は、十日のこととする。

3・10 相馬誠胤、加藤癲狂院に入院。十七日に退院。(矢田挿雲『相馬事件の真相』) *錦織剛清『闇の世の中』は、十一日入院とする。

春頃 志賀銀が石巻から東京の志賀留女に送った直哉に関する手紙あり。《河岸にて遊び、つれ帰り候と、どこまでも、又、行くとおぼれ申し候》とある。(『実母の手紙』)

7・17 相馬誠胤、東京府癲狂院に入院。(錦織剛清『闇の世の中』)(矢田挿雲『相馬事件の真相』) *相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M18・7・28書簡によれば、七月十八日に入院。

錦織剛清、偽造した明治十七年三月十一日付の相馬誠胤の委任状を添えて、志賀直道・青田綱三・石川栄昌・富田深造を私種監禁で東京軽罪裁判所に告訴。(錦織剛清『闇の世の中』)

7・23

志賀直道ら錦織剛清を私書偽造及誣告で告訴。(矢田挿雲『相馬事件の真相』(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M17・8・17書簡/M18・4・19書簡)

11・7

東京軽罪裁判所の囑託により、帝国大学のスクリッパ、三宅秀、原田豊が、相馬誠胤を診察する。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

11・22

錦織剛清、東京府癡狂院に押し入り、逮捕される。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M17・11・27書簡)

明治十八年(一八八五)

(数え三歳・満一十二歳)

2・12

伯母・せい、関屋三郎と離縁、長女・せきを連れて、佐本家に復籍。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

内幸町時代

2・?

志賀直温の銀行辞任により、直温一家は、東京麹町区内幸町一ノ六、相馬家旧藩邸内の志賀直道の役宅に移る。(新『志賀直哉全集』年譜)(阿川弘之『志賀直哉』)

志賀直行の死を直温夫妻の手落ち位に考えていた直道夫妻は、以後、直哉を専ら自分たちで非常に用心して育てる事になる。その結果、直哉と《父とは年の違ふ兄弟のやうな関係》になる。(『白い線』(『稲村雑談』)

直道は養生家で、直哉は食物は非常にやかましく育てられた。西瓜・真桑瓜・天ぷらなどは食べさせて貰えなかった。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

直道は、毎朝、太陽と神棚・仏壇を拝んだが、志賀家は迷信の少ない家だった。(『稲村雑談』)

直哉は、生涯で影響を受けた人として、師としては内村鑑三先生、友としては武者小路実篤、身内では祖父・直道を挙げている。(『内村鑑三先生の憶ひ出』)

実吉英子によれば、直道は無口で、自分の履歴など一切話したがらない人だった。孫娘の習字一つ評するにも、簡潔にその美点だけをあげ、大家族を温かく包容し、皆に信服されていた。(『阿川弘之』志賀直哉)

実吉英子の『志賀家の思い出』によれば、志賀留女は文盲だったが、記憶力が強く、厳しい人だった。(『阿川弘之』志賀直哉)

直哉は、留女の匂いを嗅ぐと幼時を想い出す程だが、母の体臭は覚えていない。(『大津順吉』第一一六) (『白い線』)

直哉は、母に対する記憶は少ない。女中のように尻を端折り、縁側をふいていた母のふくらはぎに白い線があったのを覚えている。(『白い線』)

旧藩邸は議事堂の前にあり、路を隔てて日比谷の練兵場(現・日比谷公園)に接し、雉も来ていたし、生け垣をくぐって出て行く動物を目撃した直哉は、祖母に狐だと教えられた事もある。(『稲村雑談』) (『転居二十三回』) (『ノート10』) 補

⑥ p. 44 ↓ 『暗夜行路』(第二二三)のモデル

相馬誠胤を「狂躁発作を有する鬱憂病」とするスクリップパの鑑定書に三宅秀・原田豊が同意する。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M18・4・5書簡))

志賀直温、文部省の御用掛准判任となる。(『阿川弘之』志賀直哉)

相馬誠胤、退院し、一年ぶりに帰郷。(矢田挿雲『相馬事件の真相』(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M18・

7・28書簡)

渡良瀬川の鮎が大量死し、足尾銅山の鉱毒のためかと報道される。(M18・8・12「朝野新聞」)

志賀直道、富田高慶に、志賀・青田・石川・富田ら相馬家の家政に携わる者の長屋を相馬邸内に新築することになっ

- たと報告。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M18・9・4書簡)
- 9・16 志賀直道、富田高慶に、足尾銅山の明治十七年後半季の純益分配金は八千五百円、一年で一万四千八百円の収入になったと報告。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M18・9・16書簡)
- 11・9 志賀直道、富田高慶に、相馬順胤を相馬家相続人とするを相談。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M18・11・9書簡)
- 明治十九年(一八八六) (数え四歳・満一三歳)
- 1・23 相馬誠胤の容態が悪く、府立癲狂院へ入院。(矢田挿雲『相馬事件の真相』(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M19・1・23書簡)
- 3・8 錦織剛清、私書偽造、家宅侵入罪で、重禁固一月、罰金二円の判決。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M19・3・13書簡)
- 3・9 山崎五夫・はま夫妻の長女・すずが生まれる。(新『志賀直哉全集』⑩日記人名注)
- 山崎家は以前から上京し、旧藩主・石川家に寄留していたが、この年四月に東京府北豊島郡金杉村七十八番地(石川家の旧藩邸(中屋敷)内の武家長屋、桜井勝美『志賀直哉の原像』)に全戸送籍。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)
- 4・26 相馬順胤を相馬家相続人として認められる。(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M19・4・27書簡)
- 5・? 志賀直温、文部属に任せられ、判任七等会計局出納課受払掛となる。(阿川弘之『志賀直哉』)
- 5・3 川村健之助・きやう夫妻の長男・鉄治郎が生まれる。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)
- 9・2 佐本源吾が死去。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)直哉には、葬式の記憶はない。(桜井勝美『志賀直哉の原像』)
- 11・? 志賀直道、相馬家内部の事情のため足尾銅山の組合を脱退することとなる。その持ち分は古河市兵衛が十二万円で譲

り受ける。小野組の相馬家に対する不義理は間接的に償われた。(五日会『古河市兵衛翁伝』)

足尾銅山は当たり、相馬家も古河市兵衛も相当な金持ちになったが、その頃、旧藩士の中に、華族が山をやっていることへの批判の声があり、志賀直道を排斥するような気運が起こったため、古河に譲った。古河は礼として千円を直道に贈った。(『祖父』十六)

12・6

佐本家は東京府下北豊島郡金杉村三百三十番地(石川家の旧藩邸(中屋敷)の向かい、桜井勝美『志賀直哉の原像』)に本籍を移す。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文字』)

12・?

佐本鑑蔵、せんと結婚。(桜井勝美『志賀直哉の原像』)

この年

直哉が祖父と幼稚園入園の依頼に行った時の記憶と鬼子母神へ虫封じに行った時の記憶がごっちゃになる。(『暗夜行路』草稿一)(『ノート10』補⑥p254)

この年から

直哉は、祖母に付き添われて、増上寺寺内岳蓮社附属の芝麻布共立幼稚園に、三年間通う。明治十七年に開設された府下で四つ目、全国で八番目の幼稚園。保育料が月一円、園児定員百名で、園長は旗本の家に生まれた近藤はま。夏は八時半始まり、それ以外は九時半始まりで午後二時まで。(阿川弘之『志賀直哉』)

満三歳を過ぎてから幼稚園に通う。生徒の大半は華族の子供。同じ組は三十人くらいいたかも知れない。大きな部屋に名を書いた木札がかかっている、朝、その名札をひっくり返し登園順に並べるのだが、徳川家正がいつも一番だった。水草紙の習字、粘土細工、積木、唱歌、体操などを習う。河合先生に習う。美しくもなく威張っていたM(村田「ノート10」補⑥p254)という姓の洋服の女の子と河合先生が好きになる。(『暗夜行路』草稿一)(『幼い頃』)(『福村雑談』)

この年か? / 前年か? (三つか四つの時)

志賀留女、脳病になる。志賀直道が留女を背負って、留女の使っていた機がある二階への段梯子を登っていくのを、直哉は見る。留女は直っても半身不随になると医者に言われる。留女は、以後髪を切下げにする。(『実母の手紙』)

〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕(ノート10)補⑥ p.254)

未定稿129『或る旅行記 青木と志賀と、及び其周囲。』補② p.119によれば、留女は《五十代に二年間やむだ事》がある。

この年か? 志賀家は、旧藩邸内で新築した家に移る。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕(ノート10)補⑥ p.254)〔『転居』二十三回〕

この年か? (幼稚園に入る前後)

新築の家で、直哉は母と一緒に寝ていて、床にもぐって引き上げられる。心からそれを恥じる。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕

〔『暗夜行路』草稿27〕(ノート10)補⑥ p.254によれば、四つの時に性欲があった。↓『暗夜行路』(第二一三)のモデル

※年代不明 直哉は、祖母によろかんを口に押し込まれる。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕↓『暗夜行路』(序詞)のモデル

※年代不明 直哉は、初めて油蟬を見て大きいのに驚く。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕(ノート10)補⑥ p.254) ↓『暗夜行路』(第二一三)のモデル

モデル

※年代不明 直哉は、同年代の子供と坊やというのは自分の事だと主張し合う。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕↓『暗夜行路』(第二一三)のモデル

モデル

※年代不明 直哉は、通り掛かりの女に食パンを盗まれる。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕↓『暗夜行路』(第二一三)のモデル

※年代不明 直哉は、根岸の母の実家へ連れられて行った時、夜、寝ていたところを母に両手を引っ張って起こされ、肩を脱臼。

千住の名倉へ連れて行かれた。その後も、祖父と寝床で相撲を取った時一度、幼稚園で汽車ごっこをした時もう一度

脱臼した。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕

※年代不明 直哉は、屋根に登って、祖母に怒られる。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕↓『暗夜行路』(序詞)のモデル

※年代不明 家に来ていた五、六歳年上の医者(の娘が、朝、直哉の夜着の裾から潜り込んでくる、その首を股で締め付けるのが快

感。〔『暗夜行路』草稿Ⅰ〕

※年代不明 南佐久間町にいる親類の娘が死んだ時、叔父と隣家の子供が人魂を見る。(『暗夜行路』草稿1)(ノット10)補⑥p254)

※年代不明 直哉は、叔父に石を投げ付けられて頭に怪我をする。それから間もなく墓盤で眼のふちに怪我をする。(『暗夜行路』

草稿1)(ノット10)補⑥p254)

明治二十年(一八八七) (数え五歳・満三丁四歳)

1・31 錦織剛清、ひそかに東京府癪狂院から相馬誠胤を連れ出し、後藤新平にかくまって貰う。(錦織剛清『闇の世の中』(矢

田挿雲『相馬事件の真相』)

2・8 相馬家側が、静岡で、錦織剛清から相馬誠胤を取り戻す。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

2・15 「毎日新聞」大付録に錦織剛清の『相馬家紛擾の顛末』が載る。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

2・16 錦織剛清、家宅侵入罪につき自首。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)(M20・2・17「東京日日新聞」)

2・19 相馬充胤が死去。(『平成新修旧華族家系大成』(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

二十七日に出棺。葬儀は芝愛右下青松寺。墓地は青山墓地。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

直哉は、女中頭が殿様がお隠れあそばしたと言うのを隠れん坊の意味に取る。棺の前ででんぐり返しをして見せる。

青松寺での葬式の釣鐘の響におびえる。(『暗夜行路』草稿1) ↓ 『暗夜行路』(第一二)のモデル

3・10 相馬家の宗族親族会の意向を受け、相馬誠胤は医科大学第一医院に入院し、榊俣、ベルツの診察を受ける。(錦織剛清

『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)(M20・3・12「時事新報」)

3・11 錦織剛清、家宅侵入罪で重禁固一月の判決。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)(M20・3・12「東京日

日新聞」)

4・19 榊俣らが、相馬誠胤は「時発性躁暴狂」と診断。翌日、相馬誠胤は退院し、自宅療養となる。(錦織剛清『闇の世の

中) (矢田挿雲『相馬事件の真相』)

この年か? / 翌年か? (五つか六つの時) (『歌舞伎放談』によれば、森元座で『小栗判官』を見たのは三つの時)

5・7 志賀銀が東京から大阪の志賀直温に初めて送った手紙あり。直哉が幼稚園に通っている事、森元座に行ったが直哉が

怖がった為、途中で帰った事等記されている。見たのは『小栗判官』。(『実母の手紙』)

草稿『第三篇』によれば、直哉は角力にはよく連れて行かれたが、芝居と寄席は禁じられていた。この時以来、青年期に一人で行くようになるまで、芝居には合わせて四度しか行ったことがない。

森元座は明治十二、三年頃からある緞帳芝居。明治十七、八年頃から二十二、三年頃まで最も繁栄した。明治十八、

九年頃から二十三年夏頃までは山崎扇遊(市川団升)を座頭に市川市次郎(のち團三郎)・尾上梅三郎・嵐橋鶴・片岡

燕之助一座で麻布一の人気を誇っていた。(安部優蔵『東京の小芝居』)

この年か? / 翌年か? (五つか六つの頃)

丁髷で二子縞の木綿の着物を着た古河市兵衛が志賀家を訪問。直哉には絵双紙を沢山土産に呉れる。(『祖父』十五)

明治二十一年(一八八八)

(数え六歳・満四十五歳)

3・? 志賀直温、金沢の第四高等学校へ単身赴任。(阿川弘之『志賀直哉』) *志賀家系図や『白い線』によれば、明治二十

年から二十三年までのことだが、存疑。

7末 志賀留女、持病の脳病でかなり疲労。八月初めには「余程快気に趣き、夢中に相成り候事は稀に御座候。」とのこと。

(相馬郷土研究会資料叢書『志賀直道書簡』下・M21・8・8書簡)

7・30 吉田良義・せいの子、良貞が生まれる。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

9初め 佐本源吾の三回忌。伯母・川村きやうは、すが・鉄治郎をつれて上京し、志賀家も訪問する。鉄治郎と直哉は相撲を

とって遊ぶ。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

この年か？ 相馬家の屋敷内で直哉と唯一同年輩だったのは、二軒ほどおいた隣の女の子のお清さんだった。六、七歳の時、唯一の遊び友達だった。(『暗夜行路』草稿1) (『手帳3』補⑤ p.68) (『ノート10』補⑥ p.254)

眼の悪い、声も不愉快な醜い子だったが、性質はよかった。この子と情欲的な関係で遊んだ。夫婦ではなく、女の子をお母さんにして遊んだ。直哉は潔癖だったにも関わらず、キタナイ真似をする事で満足を感じようとした。この関係は初等科入学の頃からなくなった。(『暗夜行路』草稿1)

この年

大洪水により、渡良瀬川沿岸が泥土に覆われ、足尾銅山の鉍毒が田地を覆い尽くす。翌年は鉍毒のために非常に不作。二十三年・二十四年にも大洪水があり、鉍毒が広がる。二十四年十二月に被害民が救済のための嘆願書を政府に提出、田中正造も議会で鉍毒問題について訴える。以後、長期にわたって足尾銅山の鉍毒が社会問題となる。(『荒畑寒村』谷中村漱史)

明治二十二年(一八八九)

(数え七歳・満五十六歳)

この年か？

(小学校入学以前か?)

直哉は、京橋鑰屋町の親類の家に行き泊まることになって、五つほど年上の養女・お関さんに世話になるが、心細くなって家に帰る。(『暗夜行路』草稿1) (『ノート10』補⑥ p.254) ↓未定稿22『きさ子と真三』(三)のモデル

この年か？

(小学校入学以前の夏か?)

京橋鑰屋町の事件から間もなく、直哉は祖父母と叔父とで塔の沢・小田原・江の島にそれぞれ一泊の旅。叔父と乗っていた人力車が倒れる。(『暗夜行路』草稿1) (『ノート10』補⑥ p.254)

9

直哉は、一番近い学校だった虎の門の学習院に入学(予備科六級、阿川弘之『志賀直哉』)。直方も東京府丁付属小学校か

ら転校(予備科三級、阿川弘之『志賀直哉』)。(『暗夜行路』草稿1)

学習院は、工部大学のあとの煉瓦造りの立派な建物だった。前に金刀比羅神社があり、毎月十日の縁日には、色々な見世物が教場の窓から覗けた。(『稲村雑談』)

学習院は、宮内省所轄の官立学校で、華族の子弟を教育するための学校だったが、士民の入学も認めた。華族は授業料納入の必要はなかったが、士民からは徴収した。(『学習院百年史』第一編)

華族の子弟は何度落第してもいいが、士民は同じ級で二度落第すると退学となった。(里見淳『私の一日』所収「園池公致のこと」)

明治二十一年十一月から二十五年三月まで学習院院長は三浦梧楼。(『学習院史』)

9・28

秋

勘解由小路(志賀)康子が生まれる。(新『志賀直哉全集』⑩日記人名注)

志賀直温は金沢から戻り東京帝国大学会計課に勤務。(阿川弘之『志賀直哉』)

明治二十二年十一月より、『改正官員録 甲』に文部省会計局出納課六等として志賀直温の名あり。

11?

直哉は、入学後二月ほどして腸チフスにかかり、専ら祖母の看護を受ける。直哉は、自分の一切の世話を、祖母以外の人には、たとえ母であってもさせなかった。二、三ヶ月学校を休む。(『暗夜行路』草稿1) (『大津順吉』第一110)

この年

山崎五夫・はま夫妻の次女・たけが生まれる。妊娠中に五夫が死去した為、はまは娘のすずとたけをつれて佐本家に戻った。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

この頃か?

(幼稚園の頃か、初等科の初めの頃)

直哉は、柳下亭種員の草双紙『妙々車』などの絵を見て楽しむ。(『幼い頃』) ↓『濁った頭』(10)のモデル

この年(七つ位の時から)

直哉は、百人一首を取り始める。(『幼い頃』)

この年か？／前年か？

佐本家は、御行の松の先の細い道を入った露地の奥の家に引越す。(桜井勝美『志賀直哉の原像』)

明治二十三年(一八九〇)

(教え八歳・満六〜七歳)

2 学習院予備科六級生の直哉の席順は、十九名中十七番。試験を全欠席した為。(阿川弘之『志賀直哉』)

3・5 志賀直温、文部省を非職(休職)。(阿川弘之『志賀直哉』)

芝公園時代

4・15 志賀直道が家令を辞し、相馬家家政顧問となる。(志賀家系図)

一家は芝公園地第十七号三番の元増上寺学寮の家(芝公園の丸山の五重塔の下、『稲村雑談』)に移る。(新『志賀直哉全集』年譜)昔の役僧の住まいかと思われるような古風な家だった。(有島生馬『思い出の我』S 40・7〜41・3「中央公論」)

直道は志賀直温に家督を譲る。(新『志賀直哉全集』年譜)

この頃 志賀家の財産は五、六万円。(M 45・4・7日記)

志賀直温は、この時渡された財産を後生大事に殖やし、個人的なことには使わなかった。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

この頃 志賀直温は脳が悪く役所をよして無為の生活を送る。内幸町の旧藩邸に行く途中、電信柱の側で休む父の姿が、父についての直哉の最初の記憶。父がよく行っていた暮会所まで走って迎えに行った。(『暗夜行路』草稿27)(「ノート10」)

補⑥ p54

7・11 直哉は、学習院予備科第六級を卒業。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・卒業証書)

9 直哉は、初等学科二年に進級。

*この時より、予備科は初等学科と改められる。(『学習院百年史』第一編)

9・3 学習院は四谷尾張町に移転。(『学習院史』)

11・13 木村重堅・秀夫妻の長女・峯が生まれる。(新『志賀直哉全集』⑩日記人名注)

この年 佐本鎔藏・せん夫妻の息子・経二が生まれる。せんは若死し、経二は実母の実家で育つ。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

この年か? 直哉は、内幸町の旧藩邸内の報徳会の二宮尊親の許へ芝から遊びに行く。(『祖父』七)

この年か? (七つか八つの頃)

直哉は、議事堂近くの榎本武揚の官邸に遊びに行き、榎本尚方と質素な食事をする。(『祖父』十八)

この年か? 学習院で、直哉は上級生につむじを調べられ、「生まれ変わりだ」と言われる。(『暗夜行路』草稿1) (『ノート10』補⑥)

p.254

明治二十四年(一八九一) (数え九歳・満七〜八歳)

1・23 志賀正斉が死去。(志賀家系図) 七十七歳だった。隣室に寝ていた直哉が突然烈しい泣き声をあげ、まもなく臨終だった。志賀直温の膝に抱かれたまま死去した。メーテルリンクの『闇入者』を後年読み、似た経験だと思う。正斉は江戸末期の匂いを身辺に漂わせているような人物だった。(『祖父』十四)

戸末期の匂いを身辺に漂わせているような人物だった。(『祖父』十四)

1・27 錦織剛清、東京地方裁判所に相馬誠胤の総理代人として「全癒届調印請求の訴状」を提出。その後、錦織剛清側と相馬家側は、訴訟合戦を繰り返す。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

9 直哉は、初等学科三年に進級。……

11・13 錦織剛清、相馬家の財産差押及び精算請求を訴える。翌日、相馬家の書類と財産が差し押さえられる。相馬家側から

の異議申し立て等、応酬が引き続く。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

明治二十五年(一八九二) (数え十歳・満八〇九歳)

1・12

錦織剛清、明治二十年二月三日付の錦織剛清を相馬誠胤の総理代人とする私書偽造の容疑で拘引される。(矢田挿雲『相馬事件の真相』(M25・1・13「東京日日新聞」) * 錦織剛清『闇の世の中』は、十三日のこととする。

二十九日、錦織剛清は、委任状は本物であるとして免訴となる。この時の予審判事は山口淳。(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』(M25・2・5「日本新聞」)

2・20

相馬誠胤に三月三日の東京控訴院の公判に出廷するよう呼出状が発せられる。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

2・22

相馬誠胤が死去。(『平成新修旧華族家系大成』(錦織剛清『闇の世の中』(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

翌日、相馬順胤は東京地方裁判所に相馬誠胤の尸体臨検願を出すが必要なしとして却下され、警察署に出願して臨検を受ける。二十七日、錦織剛清は二十九日に予定されている相馬誠胤の葬儀執行中止の訴えをなし、相馬誠胤死体解剖願を提出。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

3・2

相馬誠胤の葬儀が青山梅窓院にて執行される。墓地は青山墓地。(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

3

明治二十五年三月から十月まで学習院院長は岩倉具定。(『学習院史』)

5・6

志賀直道が従六位となる。(志賀家系図) * 相馬事件後に、品川弥二郎の好意で貰ったという『稲村雑談』や『祖父』(十八)の記述は誤り。

7?

三年の時の直哉の席次は三十一名中五番だった。(阿川弘之『志賀直哉』)

9

直哉は、初等学科四年に進級。.....

10

明治二十五年十月から二十八年三月まで学習院院長は田中光顕。(『学習院史』)

10・7 錦織剛清『闇の世の中』初版刊行。志賀直道と相馬胤胤の側室・西山りうが不義の関係にあり、相馬誠胤を亡き者として相馬家乗っ取りを謀ったと仄めかされる。(錦織剛清『闇の世の中』)

この頃か? (初等科の四五年頃)

直哉は、博文館の「少年文学」のお伽噺・巖谷小波の『こがね丸』や尾崎紅葉翻案の『二人むく助』を愛読。『こがね丸』が単行本で読んだ最初の本。「少年文学」には他に歴史物の『新太郎少将』『近江聖人』『上杉鷹山公』『二宮尊徳翁』などがあったが、こちらは大しておもしろくなかった。(座談会『回顧』『S君との雑談』『幼い頃』)

明治二十六年(一八九三) (数え十一歳・満九〜十歳)

この年 志賀直温は文部省非職満期。(阿川弘之『志賀直哉』)

2・1 志賀直温が総武鉄道会社に入社、会計課員となる。(志賀家系図)

直温は、旧相馬藩士・青田綱三と共に、総武鉄道会社創立に参画した。(阿川弘之『志賀直哉』)

7・17 錦織剛清が、岡野寛弁護士を代理人とし、東京地方裁判所に、相馬誠胤毒殺の犯人として、相馬胤胤、胤胤実母・西山りう、家令・泉田胤正、家扶・青田綱三、家従・石川栄昌、家従・遠藤吉方、前家令・志賀直道、医師・中井常次郎を告発した。(M26・7・18「万朝報」)(M26・7・18「東京日日新聞」)(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

7・27 相馬胤胤、西山りう、泉田胤正、青田綱三、石川栄昌、遠藤吉方、志賀直道、中井常次郎が、錦織剛清を誣告罪で告訴した。(M26・7・28「万朝報」)

8・9 東京地方裁判所予審判事・岡田晴橋が、相馬家を深夜まで家宅搜索し、十日に至り、青田綱三・石川栄昌・遠藤吉方・西山りうを拘引。(M26・8・11「郵便報知新聞」)(M26・8・10、11「万朝報」)(矢田挿雲『相馬事件の真相』)

東京地方裁判所予審判事・名越勝治が、志賀家を家宅搜索。佐野刑事巡查が、志賀直道を拘引。(M26・8・10「万朝

報〕八月十一日の「万朝報」によれば、(一昨日名越予審判事が芝公園地の志賀直道(旧相馬家々令)の家宅搜索をなしたる節は同人相馬家に来合せ居り不在に付子息の直温が立会ひ搜索を了へ午後四時過ぎ同邸を引取り相馬家に到り同人を廻町警察署へ拘引せしが同人は嘗て権大参事の職を奉じ正八位の位記を有し居る事知れたれば同夜一旦放還をなし更に昨日午前宮内省に届出で更に拘留の手続をなしたり」といふ。

高橋予審判事が、中井家を家宅搜索し、石黒巡査が中井常次郎を拘引。(M26・8・10「万朝報」)

従六位の位記があった為、宮内省の手続きを終るまで放還されていた志賀直道が、再び拘引され、鍛冶橋監獄所に拘留された。朝六時、山口予審判事の令状を携えた刑事巡査が志賀家を訪れたが、直道は相馬家に赴いて不在だったため、相馬家で拘引された。(M26・8・15「万朝報」)

明治二十七年一月一日の「万朝報」に掲載された錦織事件「予審終結決定書」によれば、山口淳は八月(十四日)に至り予審判事岡田晴橋が被告人志賀直道に対し拘引状を発したるを見て一時之を晴橋より預り置き即夜之を懐中して芝区烏森町湖月楼に至り急使を發して相馬家々扶心得西内善右衛門を呼寄せ拘引状を示して明朝志賀直道を拘引すべき旨を告げたるに善右衛門は一応志賀方迄同行し呉れ可き旨を懇請したるより被告淳は善右衛門と共に芝公園地なる志賀直道方に至り直道及び其子直温に面会し直道に向ひ明朝拘引さるべき旨を告げ尚ほ入獄後の心得等を用意し其際青田綱三よりの依頼なりと称して善右衛門より金三百円を差出したるに被告淳は直に之を收受したり」(被告淳は其後志賀直温と処々に密会し或は書面を以て往復し居り)云々とある。

「万朝報」に「相馬事件先代萩俳優見立」が載り、青田綱三が仁木弾正、志賀直道は鬼貫などとされる。

直哉は志賀直道と志賀留女の間で寝ていた。寒い晩など、大きい祖父に抱かれて寝るのが好きだった。直道が連れて行かれたのは、生涯最初の悲しい出来事。毎日未明に誰か差し入れを持って直道に面会に行くが、直哉は毎日夜中に目を覚まし、誰が何を持って行くのかを留女に聞いた。(「憶ひ出した事」(祖父)18)

この頃

8・20 「万朝報」に《浅草公園の常盤座は今度相馬騒動を仙石騒動に書替へ来る廿三四日頃より興行する由》との記事が出る。

8・22 「万朝報」に《錦織氏の写真を求むるもの多し》との記事が出る。

8・28 志賀直温が証人として東京地方裁判所で岡田判事の取り調べを受ける。(M26・8・29「万朝報」)

この頃 半杭直人が、ゆすりに来る者をやりこめる。志賀直道の妹・おうの叔母は、メソメソし、毎日占いを見て貰いに出かける。志賀留女は錦織の写真に釘で穴をあけ、縁側の裏側に打ち付ける。(憶ひ出した事)

9 直哉は、初等学科五年に進級。……………

9・1 「万朝報」に、嘗て哲女館という女学校に通っていた志賀直道の娘が贅沢三昧の生活をしていたとの記事が出る。

この頃 直哉は学校に行くのが嫌だったが、未決に入れられている青田綱三の長男・幸吾(学習院出身の砲兵少尉)に誰かが相談に行き、平気で行くよう言われる。同級で一番腕力の強い榎本尚方が、柔道場の側のトラップスの砂の上に、直哉を連れて行って、《君のおぢいさんの無実である事は僕はちゃんと知つてゐる》と言つて励ます。(憶ひ出した事)

〔祖父〕十八)

9・8 相馬誠胤の墓発掘及び死体解剖。(M26・9・14「郵便報知新聞」)(矢田挿雲「相馬事件の真相」)

9・10頃 山口淳は日本橋区茅場町香川亭に於いて、志賀直温から賄賂として二百円を受け取る。(M27・1・1「万朝報」掲載の錦織事件「予審終結決定書」)(矢田挿雲「相馬事件の真相」)

後年、直哉は、直温が便宜を計つて貰う為、予審判事・山口淳に秘密に会いに行った事を知り、不快に思う。(暗夜

行路「草稿27」)(祖父「十八」)

10・12 志賀留女が証人として岡田判事の取り調べを受ける。(M26・10・14「万朝報」)

10・24 毒殺事件の被告が全員免訴となり、志賀直道らは放免される。(M26・10・25「万朝報」)(矢田挿雲「相馬事件の真相」)

直道の帰宅に胸がつまって隅にかくれていた直哉は、直道の前に引出されて泣き出す。〔懐ひ出した事〕〔祖父〕十
八)

錦織剛清・岡野寛らが誣告罪で拘引される。(M 26・10・25「東京日日新聞」)

10・25

予審判事・岡田晴橋が錦織剛清と密会していたと新聞記事に出る。(M 26・10・25「朝野新聞」)

予審判事・山口淳が錦織剛清と密会していたと新聞記事に出る。(M 26・10・25「東京日日新聞」)

山口淳が拘引される。(M 26・10・26「万朝報」)

10・27

相馬順胤を初めとする相馬事件の被告が免訴となり、「晴天白日」の身となったという相馬家の広告が新聞に出る。

(M 26・10・27「東京日日新聞」)

11・16

内務省衛生局長・後藤新平が、錦織剛清誣告事件の教唆者として拘引される。(M 26・11・17「万朝報」)(M 26・11・17

「東京日日新聞」)

この年か?

直哉は、志賀直温と相撲をとって後手に縛られ、腹から父を憎いと思う。〔暗夜行路〕草稿27(二) ↓ 〔暗夜行路〕(序

詞)のモデル